

民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵

— 壬午軍乱時の小林清親作品を中心に —

青 木 然

Summary

This article focused on how we can relive people's recognition of Korea from nishiki-e paintings. This article mainly used the pictures of the Imo Incident in 1882, because there are many pictures and other entertainment masterpieces on it not only in Sakurai Yoshiyuki Collection but also all in Japan. The expressions of the Imo Incident was based on Seikan-ron (claim to conquer Korea) which has claimed by samurai since the end of Edo era.

However, they also show us the objective view points for Korea society and various opinions on the incident in Japan. Because nishiki-e and other people's entertainments at that time were under influence of city people's culture from the end of Edo era to first half of Meiji era, and this culture was base on the common sense that people could not talk about politics. This sence paradoxically brought about the third view for the politics and the Westernization of Asia.

はじめに：民衆の対外認識をどう探るか？

本稿では、「桜井義之文庫 朝鮮関係錦絵」の史料の意義を考える試みとして、一連の錦絵から、当時の民衆の朝鮮認識にどのようにアプローチできるかという問いを考えてみたい。

1990年代以降、日本でもテキスト論の影響が強まり、メディアや娯楽作品が、歴史研究でも従来より幅広く活用されるようになった。それらが制作者の意図の表れとしてだけでなく、同時代の言説を構成する諸要素として把握されるようになり、受け手である民衆の意識、社会意識を探る素材としても、使われるようになったのである。そうした研究潮流のなかで、錦絵を用いた朝鮮認識研究も登場してきている¹⁾。

ただ、錦絵の表象に対して、現在の私たちが抱いた印象を元に朝鮮認識を論じていけば、当然ながら当時の朝鮮認識とは乖離が生じてしまう。では、できる限り当時の民衆の目でその表象をとらえようとする際、どのような作業が必要となるだろうか。考え得る方法として

民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵

は、次の二つが挙げられる。

ひとつは、当時の民衆が得られた海外の情報の全体像を把握するということである。錦絵が報道媒体としても機能していた時代、そもそも民衆が得られる海外の情報は極めて限られていたが、その限られた回路を押さえ、複数の媒体の情報を突き合わせていくことで、当時の民衆が得ていた情報は、より立体的に浮かび上がってくるだろう。

もうひとつは、外国（人）を表現する際の形容・語りが、当時の文脈ではどのような意味を持っていたかを解明することである。近世社会では、民衆が政治に言及することが厳しく制限されており、錦絵の表現形式にも影響を与えていた。明治期になると、文明開化や啓蒙が謳われ、新聞が登場し、こうした状況は少しずつ変化していくが、民衆の政治意識や錦絵の表現形式が直ちに一変したわけではない。段階的な変化を踏まえつつ、表現の意味を分析していく必要がある。

そこで本稿では、錦絵の点数が多く、周辺史料も比較的充実している壬午軍乱関係の錦絵に注目し、まず当時の民衆文化の状況を、次に壬午軍乱の情報が民衆にどのように広がったかを押さえたうえで、壬午軍乱関係の錦絵・絵本を多く手がけた小林清親の作品を分析し、民衆の朝鮮認識にアプローチしてみたい。

1. 幕末～明治前期の民衆文化

壬午軍乱当時（1882年）、民衆は海外の情報にどのように接していたか。

内地雑居が許可される1899年以前、民衆が直接外国人と交流する機会は、極めて限られており、海外の情報は、基本的には教育・報道・娯楽といった要素をつうじて知る存在だった。その教育・報道・娯楽も、日清戦争の前後で状況が大いに異なっている。

就学率が8割を超えるのは、男子で1890年代、女子で1900年代と推定されており²⁾、明治前期の学校教育の影響は、ごく限られたものだったといえる。また日清戦争前の新聞は、政論や政治小説が中心の「大新聞」と、雑報や戯作が中心の「小新聞」に分化していた³⁾。国際情勢の詳細を論じたのは大新聞だが、こちらは民衆にとって難解な内容を含んでいた。日清戦争前の民衆に強い影響力があったのは、近世以来おもに町人によって培われてきた娯楽作品や、その流れを汲む小新聞だった。

この娯楽作品は多岐に渡っていたが、なかでも錦絵・絵本・講談は、ニュースを民衆向けに説くことで、報道や教育の役割も果たしていた。朝鮮の情報も、おもにこの回路をたどることで、いちど民衆向けの語りに再構成されてから民衆に届けられた。ニュースに対する民衆のリアクションは俗謡に歌い込まれ、定番化した歌は歌本に採録された。歌本は、錦絵や絵本を売る地本問屋で売られ、流行した俗謡はさらに広く伝播した。

日清戦争以後は、大新聞・小新聞の時代から、速報性と「不偏不党」を売りにした大衆新

聞の時代となり、学校で教育する知識を前提とした、少年・少女向けの雑誌やグラフィック・メディアも登場した。こうした新たな活字メディアの登場と前後して、錦絵・絵本・講談といった娯楽のジャンルは日清戦争後に衰退していった。

その意味で、民衆が海外の情報に触れる重要なソースだった娯楽作品は、海外の情報が増えはじめた開港期から、錦絵・絵本・講談が衰退しはじめる日清戦争までの時代区分のなかで、とらえることができる。桜井義之文庫の朝鮮関係錦絵が、この時期のものが中心となっているのは、コレクション自体の傾向というだけでなく、錦絵が民衆への海外情報の伝達を担っていたという時代性そのものを映した結果でもある。

冒頭でも述べたとおり、近世において民衆はあくまで被治者であり、世の中で起きていることを正確に知ったり学んだりすることを治者から求められなかった。日々の慰安である娯楽作品のなかに、民衆の知的好奇心を満たすべく、世事が平易に説かれていたのであって、それらの作品は政治を主体的に考えるための判断材料として作られたわけではなく、根拠を明示して正確さを期すことは重視されなかった。明治に入ってから、新聞に代表される民衆啓蒙の動きもあったものの、彼らの政治意識がただちに一変したわけではないし、自由民権運動への規制のように、治者以外が政治に言及することは、やはり依然として厳しく制限されていた。ただ後世の私たちは、こうした民衆の政治参加をめぐる状況を、単に遅滞性としてとらえるのではなく、制限下で世事や政治をとらえ表現していた、ひとつの文化としてとらえる必要があるだろう。そうすることで、娯楽作品における政治状況や外国人の表現に、民衆独自の政治意識がどのような影響を与えていたのかという視点で作品を分析することができ、ひいては民衆の対外認識にアプローチしていくことができるといえよう。

2. 壬午軍乱時の情報の広がり

壬午軍乱は、1882年7月23～24日に漢城で発生した、兵士による給糧不正の糾弾を発端とする反乱である。反乱には都市下層民も参加した。蜂起した人びとは日本公使館や周辺を襲撃し、堀本礼造陸軍中尉ほか語学生が殺害された。襲撃を受け漢城の日本人は済物浦へと逃亡したが、済物浦でも巡査・公使館員・語学生らが死傷した。花房義質公使ら一行は済物浦から英船で帰日した。一方、大院君が反乱を閔妃政権へのクーデターにも仕向け、閔妃・閔氏一族・開化派も襲撃の標的となり、閔謙鎬らが殺害された。日本はこの事件を受け7月31日に朝鮮への派兵を決定し、8月16日に漢城へ入京した。清も8月1日に派兵を決定し、8月20日漢城に進軍を開始した。8月30日には、日朝間で日朝修好条規続約と済物浦条約に調印し、終結を見た⁴⁾。

この蜂起には、日朝修好条規体制下の米価騰貴によって、朝鮮社会の矛盾が表出したという背景があり、閔氏政権による開化政策と日本の介入に対する、守旧派による揺り戻しとい

民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵

う政治的な意味があった。一方、日本国内では、不平士族のなかに燻っていた征韓論の実現ととらえられ、義勇軍の結成や軍への献納などの動きもあった。壬午軍乱の動向を逐次集約して報じた雑誌『電報朝鮮事件』の1882年8月10日に出された第三報には、日本人が蜂起の犠牲になった報が届いたことで、日本国内で征韓論が高まっている諸事例が紹介されている。以下の記事はそのひとつで、報を聞きつけた薩摩の壮士たちが征韓の志願者を募っている状況を報じたものである⁵⁾。

薩摩出身の某参議より同県の共有社長河野主一郎君の許へ、今回の朝鮮事件を電報を以て通信せられ、其末文に、政府若し兵端を開く場合に至らば国家の為に先鋒なし、去る十年の恥辱を雪ぐべしとありければ、河野君よりは貴報雀躍拝誦と返報せられし由、又朝鮮事件の同県下に達せし以来、同県の壮士輩は何れも皆開戦論を主張し、万一征韓などの事もあれば一方の堅をもなさんと逆、目下野村忍助君は大坂に、小浜某は東京に出張して頻りに同意者を募集し居る趣あり。

こうした世論の高まりもあって、壬午軍乱の情報は民衆も高い関心を示した。事件終結から約1カ月後にあたる、1882年9月30日の『郵便報知新聞』には、「大坂講談師取締の石川一口より、朝鮮事件を講談せんとて其事を府庁へ伺出でしに、詮議の次第あれば、当分相成らずと指令されたり」との記事がある。石川一口は当時の人気講談師の一人である。大阪府では、興行の事前届出を定めた寄席取締規則が、同年9月11日に公布され、10月1日から施行されることになっていた⁶⁾。この規定が適用されるか微妙な時期ではあるが、一口は、興行前に壬午軍乱の講談を読むことを告知して、呼び物にしようと考え、事前に許可を求めたのではないだろうか。大阪府庁に伺いを立てたところ、詮議のため当面不可とされたという。これは官憲の規制を示す事例だが、寄席の興行記事をまとめた史料集からは、壬午軍乱関係や朝鮮一般の事情を扱った講談が、9月下旬から12月初旬まで多く興行されていたことがわかる⁷⁾。

同年10月14日『読売新聞』の報道からは、事件関連の錦絵が流布した状況の一端も確認できる。

此ごろ絵双紙屋にて売捌く朝鮮暴動の形状を書きたる錦絵十三種は、店頭に掲げ置くは不都合ゆゑ、行人の眼に立たぬやうに夫々注意せよと、昨日右の出版人を其筋へ呼出して申し渡されたといふ。

壬午軍乱に関する錦絵を売っている絵双紙屋に対して、店頭が目立つように置かないよう、「其筋」の注意があったことを報じている。版行自体は許可されたようだが、行人に目立

つように置くことを「不都合」としており、民心に配慮しつつ規制のバランスを取ろうとする官憲の姿勢がうかがえる。桜井義之文庫に限らず、壬午軍乱関連の錦絵は現存数も多いが、ここでも13種売られており、多くの錦絵が作られたこともうかがえる。

一方、同日の同紙には次のような報道もある。

去る八日に園開きをした浅草奥山の造り菊は、桃太郎の図（是は朝鮮事件の和議に擬へしもの）、菊児童、道灌雨舎どり、大江山の図、鬼一菊畑、加藤虎狩、雀をどりの七箇にて、何れも見事に出来ましたと。

浅草奥山は、当時東京の見世物興行の中心地で、なかでも菊人形は秋の風物詩だった。壬午軍乱の和議を「桃太郎の図」に擬えたとあり、ここでも事件は直接的には表現されていない。いわゆる書契問題に代表されるように、幕末からの征韓論は、「問罪の師」として朝鮮に出兵すべしという主張であり、壬午軍乱時の派兵は、前述のとおり日本国内ではその実現と見なされる向きもあった。壬午軍乱の段階では、日清戦争後の弱小視的な朝鮮認識と違い、朝鮮は無礼だが、日本と力量は拮抗しているとの見方が、士族のあいだで共有されていた⁸⁾。桃太郎対鬼という構図は、こうした朝鮮認識とも符合する表現であったといえよう。

この菊人形興行では、もうひとつ、加藤虎狩という朝鮮関連の題材も見える。加藤清正の虎退治は、豊臣秀吉の朝鮮征伐とともに定型化された、神功皇后の三韓征伐と並ぶ、古典的朝鮮像である。

園部裕之によると、1875年（明治8）の江華島事件時の小新聞の投書にも、こうした古典的朝鮮像が散見されたという⁹⁾。そのなかには、日本政府が事件を受けて、寅年生まれの男性を徴兵し、朝鮮と戦争を始めるという流言もあった。朝鮮飴や朝鮮人参を想起している投書もあった。園部は、朝鮮に関する情報の不足が、こうした「過去形の朝鮮像」を氾濫させたとし、たとえば朝鮮通信使が通った地域では、朝鮮といえば詩文応酬を想起する民衆が日露戦争後まで存在したと述べている。また鈴木文は、翌1876年に、第一次朝鮮修信使が来日した際も、その行列の姿から、祭礼や朝鮮飴売りを想起した民衆がいたことを明らかにしている¹⁰⁾。

壬午軍乱については民衆にも多くの情報もたらされたものの、官憲の規制もあり、江華島事件時や第一次朝鮮修信使来日時のように、古典的な朝鮮像によって穴埋めされることもあったといえる。

3. 壬午軍乱時の小林清親作品

①壬午軍乱当時の小林清親の画業

小林清親（1847-1915）は、幕末から明治前期に活躍した人気絵師で、報道画や風刺画も手がけた。壬午軍乱当時は、清親の画業の中心が、風景画から報道画・風刺画にシフトしていく時期に当たる。清親は、1876年から「光線画」と呼ばれる、洋画の遠近法と陰影描写を取り入れた新しい風景画の錦絵を世に出し、人気を集めた。さらに1881年ごろから、画業の中心は徐々に風刺画に移っていった。娘の小林哥津は、不景気もあって版元の商売の傾向が変わっていったのではないかと推察している¹¹⁾。

1881年、清親は戯作者の鶯亭金升から誘いを受け、『团团珍聞』の挿画を手がけるようになる。『团团珍聞』は、反官・反土族的な政治姿勢をとる風刺雑誌として、自由民権運動が高揚するなかで支持を集める一方、清親を誘った鶯亭金升のように、戯作者の流れを汲む投稿者連を社内に取り込むことで、江戸町人によって育まれてきた風刺の要素も内包していった¹²⁾。清親はかねてから、イギリスより報道画家として1861年に来日したワーグマンや、やはり風刺画を手がけ清親と親しい関係にあった河鍋暁斎の影響を受けていたが¹³⁾、『团团珍聞』に関わるようになったことで、政治を題材とする絵をさらに自分のものとしていったと考えられる。壬午軍乱関連の絵は、まさにその時期に手がけたものだった。

なお、ビゴーが『团团珍聞』の挿画を手がけ、清親と関係を深めていくのは1885年以降のことである。また壬午軍乱のあった翌年1883年には、1882年に発生した激化事件のひとつ、福島事件首謀者6名の絵を講談「天保六花撰」になぞらえ、転覆を振った『天福六家撰』としたシリーズで出版し、うち2枚について発禁処分を受けている。この絵を依頼したのは、江戸町奉行所の与力から政治活動家に転じた原胤昭だった¹⁴⁾。壬午軍乱関連の絵にも、原胤昭を出版者とする作品が複数ある。清親自身も、幕府の御蔵屋敷の惣頭取を務める家に生まれ、維新の際はその動乱に翻弄されており、そうしたことを踏まえても、清親の報道画は明治政府とは一定の距離を取るものだったと見てよいだろう。

②錦絵作品

ではいよいよ桜井義之文庫に遺された作品を検討していきたい。まず、報道画としての性格が強い図1「朝鮮大戦争之図」（原胤昭版、1882年）、図2「朝鮮電報録」（船津忠次郎版、1882年）に注目する。どちらも登場人物が見得を切る芝居絵のような構図になっているが、これは幕末から明治前期にかけての報道色の強い錦絵によく見られる特徴である。

図1は8月届となっており、7月23日に蜂起した兵たちによって日本公使館が襲撃された情報を受け、すぐに制作されたものと考えられる。日本公使の花房義質、公使らを護衛し

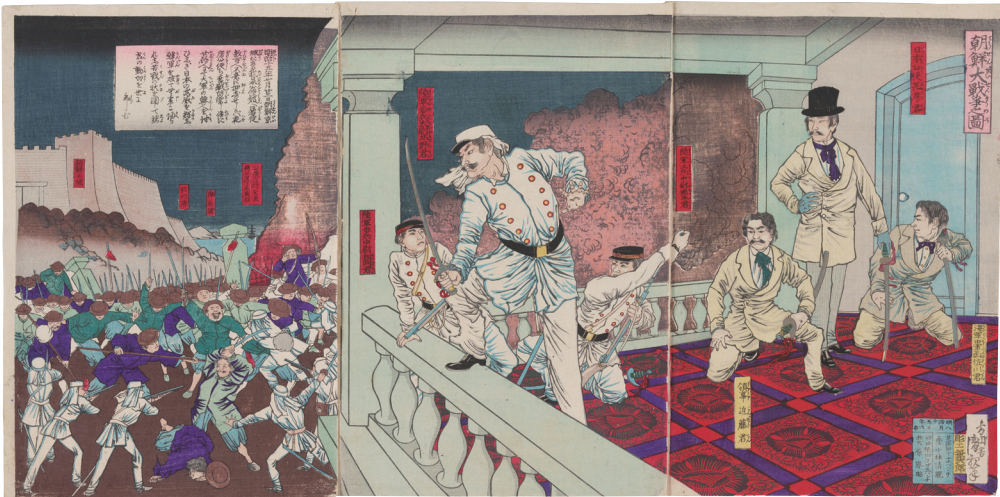


図1 清親「朝鮮大戦争之図」



図2 清親「朝鮮電報録」

た陸軍の水野勝毅大尉，堀本礼造中尉らが描かれている。花房は面長で口ひげをたくわえた姿で描かれており，写真資料と比較すると，似せて描いていることがうかがえる。

遠近法や建物の影の付け方などには，光線画に見られたような，西洋画の技術を模倣した巧みな写実性が見て取れる。ただし，細部に目を向けてみると，遠景には「仁川府」「済物浦」「公使の一行を長崎に送りし英船」が描き込まれており，実際にはあり得ない構図となっている。近景から遠景に従って，①日本公使館で襲撃を受ける，②仁川（済物浦）へ逃亡，

③英船に乗って帰国と、花房らの動きを時系列に描いているのであり、一場面を描いた絵のなかに事件の経過も集約してしまう表現は、浮世絵的でもある。

また、日本軍と朝鮮の反乱兵士に注目すると、日本軍が銃やサーベルを使用しているのに対し、朝鮮は剣や竹槍で、新旧の対立構図が単純化されて描かれている。これを文明対野蛮の構図と見ることもできよう。ただし、9月末以降に新聞で報じられたところによれば、堀本を殺害した孫順吉は麵屋を営む者で、孫は路傍の石で撲殺したと証言している。他にも鍛冶屋や飲食店などを営む都市民が多く蜂起に加わっており、兵士と民衆による複合的な反乱が日本公使館に押し寄せたというのが、実際の姿だったようだが¹⁵⁾、そうした情報が入る前に、想像で補完された図1のような錦絵が流布したことにより、日本には両国軍の戦闘として広く知れ渡ったのである。

図2は9月6日届となっており、日本軍がすでに派兵された状況下で発行された絵ということになる。軍乱の際の朝廷内を描いた絵である。背後には、蜂起した兵士たちと宮城が燃えるようすが描かれている。前年の1881年、清親は自らの家も失った両国の大火をスケッチし、光線画として発表している。炎が風に煽られて斜めに立ち上っていくさまや、炎の明るさが人びとを影絵のように浮かび上がらせていくさまは、この両国大火の絵とよく似ており、清親が自身の経験を報道画に活かしていることがうかがえる。この後景には「頑固党」との言葉が付されている。当時、文明化を是としめない人びとは、錦絵や新聞で「旧弊頑固」などと表現された。こうした形容は、朝鮮だけに向けられたものではなく、文明開化の風潮に背を向ける国内の民衆にも向けられた言葉であった¹⁶⁾。

中央では、大院君が閔妃に毒を飲ませようとする場面が描かれている。これは、事件当初の誤報に基づいたもので、実際には閔妃は毒殺されていない。ただこの誤報は、大院君が正式に発表し、国葬まで営むという念の入った意図的なものであり、検証する術を持たなかった日本の新聞はこれをそのまま報じたため、上垣外憲一は「この時点までは誰もが王妃は殺されたと信じていた」としている¹⁷⁾。

次に、風刺の効いた作品として、図3「動物館ニテ子牛暴狗に噬（かまれ）たる戯」（原胤昭版、1882年）に着目する。壬午軍乱の関係者たちを動物にたとえ、動物を集めた見世物興行の引き札になぞらえた作品となっている。こうした風刺の技法は、『团团珍聞』の風刺画でもよく用いられている。

征韓論で下野した西郷隆盛や江藤新平は幽霊の姿をしており、西郷は「そらみた事か、あのさハぎハ」、江藤は「十年もまへからしん平したのだよ」と述べている。ここでも、壬午軍乱による日本の派兵が、征韓論と結びつけて描かれている。西南戦争の際から西郷は錦絵など娯楽作品に度々取り上げられ、民衆にも親しまれていたことから、この絵は、壬午軍乱と征韓論との結びつきを民衆にわかりやすく伝えたと推察される。

軍資金を抱えている大蔵卿松方正義は松紋の着物で描かれ、出兵した陸軍を指揮した高島



図3 清親「動物館ニテ子牛暴狗に噛たる戯」

軾之助は鷹の姿で描かれているように、名前の振りと似顔絵の両方で表現されている人物もいる。「まあ／＼しづかに」とたしなめているのは、派兵に慎重な立場をとった『東京日々新聞』の福地桜痴で、「おたふく」に「チ」で「ふくち」となっていると考えられる。

一方、官吏は鯰で、民権論者は「ミン／＼」なく蟬と「ケン／＼」なく雉で、朝鮮兵士は笠子帽を被った犬で、花房公使は鼻に房をつけた牛でと、完全に動物で表現された存在もいて、ロシアは獅子、清国は豚で表されている。

こうした洒落を効かせた政治状況の暗喩には、政治に言及できなかった時代の民衆文化の表現方法の影響が見て取れる。その一方で自由民権運動の動向にも目配りし、壬午軍乱に対するさまざまな見方を紹介している。浮世絵の風刺を踏襲しながら、『团团珍聞』で自由民権運動にも接近していた、当時の清親ならではの絵といえる。

③絵本『朝鮮異聞』

最後に、桜井義之文庫の作品ではないが、同じく小林清親による壬午軍乱関係の作品として重要な絵本『朝鮮異聞』を検討したい。本書は四巻建てで、日朝関係の歴史、朝鮮の国情を含め、詳細に壬午軍乱を紹介している。文章に挿絵を豊富に盛り込んだ木版刷りで、沢村屋（武川清吉）が版元となっているが、著者については「編輯人 小林清親」とだけ書かれており、文章がどのように編まれたか詳細は不明である。初編・第二編は8月22日届、第三編・第四編は9月1日届となっており、講和前に制作されたことがわかる。

初編では、次のように日朝関係が語られている。

朝鮮の風俗は大略支那に同じく、文学を好み漢文を講習する者多し、地勢山派多く肥田沃野あり、人參を以て産物の第一とす

我国朝鮮と交際をむすぶは、もつとも古し、神功皇后三韓を征せられ、(中略) ことごとく同国の民我が 神統連綿たるの皇威にふくし、際を乞ふにいたる、爰において彼国の我が服従たること明きたり、その後数年をへて彼れ献貢のこと怠り、終にまた豊臣秀吉その貢納をおこたりしをふかく憤りて、文禄年間秀吉我が兵数万をかの国に渡航させ、まづ釜山浦に上陸させ、直ちに兵を王城にすゝませ、数日ならずして險阻をたのみ城郭をぬき、ここに勝利を得たり(中略) 外務大丞丸山作楽君を修信使とし、彼の国に派遣せられ、彼の国の大夫に就きてしたしく往古の交際説き、ことに方今欧米各国の事情をときて只管ばう易の道をひらかんことを乞へども、悲しむべし同国の士民は世界万国の開化進歩の景況をしらずしてたゞ国権の暴威を主張し、さらに我が修信使の**ことばを用ひずあまつさへ我が使に対して種ぐの失敬をほどこし**、殆んど修信使をして、その身危うからしめんとす、(中略)

朝鮮が漢籍への造詣が深い国として紹介される一方で、神功皇后や豊臣秀吉の時代に遡り、日本に対して礼を失することの多かった歴史が説かれている。また、現在の朝鮮が「世界万国の開化進歩の景況」を知らないという、文明国の立場に立った蔑視も見て取れる。国学的な歴史観に基づく典型的な征韓論と、文明国としての優越意識が、壬午軍乱の際に、民衆に広く説かれていたことを示す重要な記述といえる。

しかし第二編以降からは、こうした事件認識に必ずしも縛られない多様な視点で、壬午軍乱が語られていく。まず第二編で紹介されている、事件前のエピソードに注目したい。

朝鮮の変について、京城東大門の傍に外濠の水門あり、それに大いなる貼札をなしたる者あり、其文に曰く東夷日本人居留の下都監は日ならずして我が義徒の焼はらふところなる可きにつき、近傍の民家はその用意をなし延焼の虞に備ふる処なるべし、若し將この変に付、その患を免れんと欲せば、韓錢四十貫文を齎らし、これを義徒に納るべし、云々と貼札あり、同地近傍の人民これを見て大ひに畏怖して、にはかに隣閭の人とあつまりて相会して、かの貼札のごとく変あればわれ／＼不幸は如何ばかりぞや(中略) 一同相談もとのひ戸毎錢をあつめ合せて、二貫文の錢を大門外水閘の柱にさげておきたるに、笑止や幾夜過ぎてもこれを取去らず二貫文は幾日となく、依然とおなし水勢激烈なる水門の柱頭にかゝりたるに、人民はなほ怪しみて金の不足なるゆへに敢て取去ずや、さもあらば遮莫あれ、家屋も焼れん、四十貫文の大金は、今更整ひ様なしとて其後人民心を決してかの二貫文をとり戻し来れり

献納金を求める蜂起軍の張札に恐怖する民衆の姿を伝えているのである。これは、当時『朝日新聞』釜山駐在員をしていた、対馬出身の文学者半井桃水の記事を下敷きにしたものと考えられる。1882年8月2日の『朝日新聞』には、次のようなよく似た記事がある。

朝鮮通信（去廿四日釜山発）五月七八日頃なりしが、東大門の傍にある水門の上に張札して、錢四百兩を此所に持来て置べし、否らざれば下都監の火薬庫に火を伝へんと（火薬庫は通信者等の居房の傍にあり、人家櫛比の中央に火薬庫あるは実に劍呑々々）、夫に付近傍の人民は大に恐怖して二十兩を水門の上に備へたりしに、惡漢之を取去らず、猶頻に前額を促すの張札して止ざるゆゑ、人民益々困り居るといふ

こうした記事があることで、読む者は、反乱を起こす側だけではない、その周辺の民衆の存在に思いを致すことができ、朝鮮社会を立体的にとらえることができただろう。

第三編では、蜂起の背景が蜂起軍の視点から次のように紹介されている。

此度の事は内乱よりの起りなり、最もへんは兵士の俸給と与の不都合にぞ、遂に大院君をして、平生の隱謀をなすの機を得せしむるの本となりたる、元來京城の常備軍は総数五千七百余人にして、近來頻りにその練習を急にするの有様なりしが、いかなる故にや韓廷においては本年正月韓曆なり、更に俸給を与ふる事なりしより、兵士等は夫に不平を抱き頻りに右俸給下渡しのことを政府に請求したるに、去る六月に至りて、僅に一月分の俸給を渡したるのみにて夫さへ何れも蠹敗したる古米のみなりしかば、兵士一同はいよ／＼激怒し頓て、旗総これは軍曹のごときものにて、其四名をえらみて私かに政府の倉稟を監守する官吏に対し痛く乱暴なる挙動に及びたるにぞ四名の旗総は遂に捕縛されて

兵士が如何に不遇を味わっていたかを丁寧な叙述しており、読者に蜂起が止むを得ない事情で発生したことを想起させるものとなっている。

第四編では図2と同様、閔氏毒殺の誤報に基づいた場面を次のように悲劇的に描出している。

兵士等憤激の余り遂に大院君の邸にいたりて、右の事情をつぶさに告げて大いに政府が処置の刻薄なる由を訴たへたるに、大院君はかねて謀ることのある折柄なれば、心ひそかに喜ぶところある様子にて（中略）王妃も今は是までなりとやおもひけん、無念やおちる泪もろ共に大院君がすゝめる一ばいの鳩毒をとつて半のみ、残りを嬪宮これは世子妃にて歳十一なり、毒水をすすめし、慄れむべし、両妃は花前の嵐、月前の露なり、

民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵

世にうきことの知らざりしに、さつとふりたる雨のあと、ともにはかなくなりうせたまひたり

このように『朝鮮異聞』は、冒頭こそ日本側の視点で事件が解釈されているものの、蜂起を起こした兵士たち、その周辺の民衆、そして襲撃された閔氏と、それぞれの立場に共感を寄せるかたちで編まれている。図3の風刺画も多様な立場を描いていたが、絵本という、さらに情報を盛り込める媒体では、朝鮮社会が立体的に描き出されていた。

おわりに

姜徳相は、壬午軍乱期の錦絵を総覧し、尊王征韓的朝鮮属国論と脱亜入欧の複合した朝鮮観をそこに見出している¹⁸⁾。本論で述べてきたことを踏まえると、この見解をさらに次のように補強することができるだろう。

壬午軍乱では、民権派の派兵慎重論はあったものの、士族層の心情レベルでは、征韓の実現と見る向きが強かった。そこでの朝鮮認識は、日本の方が西洋文明の受容は進んでいるが、国家としての力量はほぼ拮抗しているが、日本に対しての礼を失しているというものであり、「問罪の師」として派兵して、国家間の戦争をすることが想起されていた。見世物や錦絵も、基本としては、こうした古典的な朝鮮像の延長上にある作品が多かった。

そして、風刺的な錦絵や情報を多く盛り込める絵本になると、日本のなかの派兵慎重派の意見を取り上げたり、朝鮮社会の軍乱をめぐる多様な立場を紹介したりするなど、視点の複眼性が認められた。

こうした状況からは、日本の民衆自身が、まだ西洋文明を内面化できていなかったがために、文明化の進度で他民族を測る視点に実感が伴っていなかったという事情、そして、被治者的な語り方が色濃く残っており、特定の立場に肩入れして主体的に朝鮮を把握しようとする視野がなかったという事情が影響していたと考えることができる。

注

- 1) 文公輝「錦絵・錦絵新聞にみる朝鮮・中国へのまなざし：江華島事件から日清戦争まで」、『大阪人権博物館紀要』第2号（1998年）。姜徳相『錦絵の中の朝鮮と中国：幕末・明治の日本人のまなざし』（岩波書店、2007年）。
- 2) 土方苑子『近代日本の学校と地域社会：村の子どもはどう生きたか』（東京大学出版会、1994年）。
- 3) 山本武利『新聞と民衆』（新装版）（紀伊國屋書店、1978年）。
- 4) 芝原拓自『日本近代化の世界史的位置：その方法論的研究』（岩波書店、1981年）。藤間生大『壬午軍乱と近代東アジア世界の成立』（春秋社、1987年）。長谷川直子「壬午軍乱と日本」、

- 趙景達編『近代日朝関係史』（有志舎，2012年）。
- 5) 水谷新八編『電報朝鮮事件』第三報（錦松堂，1882年8月10日），9～10頁。
 - 6) 倉田喜弘編『明治の演芸』（2）（国立劇場芸能調査室，1981年），31～35頁。
 - 7) 前掲『明治の園芸』，吉澤英明編『講談明治編年史』（吉澤英明，1979年）からは7件の興行が確認できる（拙稿「日本民衆の西洋文明受容と朝鮮・中国認識—娯楽に託された自己像から読み解く」，『史学雑誌』123編11号（史学会，2014年11月））。
 - 8) 壬午軍乱時の征韓論をめぐる様相については，拙稿「原正忠「韓行日記」からみる壬午軍乱と朝鮮観」，『アジア民衆史研究』第24集にて詳述した。
 - 9) 園部裕之「江華島事件と日本民衆」（『史観』130号，1994年3月）。
 - 10) 鈴木文「第一次修信使来日時にみる日本人の朝鮮認識と自己認識」，『朝鮮史研究会論文集』第45集（2007年10月）。
 - 11) 小林哥津『「清親」考』（素面の会，1985年），70頁。
 - 12) 山口順子「解説」，『团团珍聞』復刻版（本邦書籍，1981年）。
 - 13) ワーグマンの影響については，「ワーグマン年譜」，清水勲編『ワーグマン日本素描集』（岩波文庫，1987年）。河鍋暁斎との関係については，酒井忠康『開化の浮世絵師清親』（平凡社ライブラリー，2008年。初出はせりか書房，1978。），56～60頁。
 - 14) 小林哥津，前掲書，44～45頁，67～68頁，73～78頁。黒崎信「小林清親君の伝記」，『清親画伝』（松木平吉，1927年）。
 - 15) 藤間生大，前掲書，22～28頁。
 - 16) 拙稿「日本民衆の西洋文明受容と朝鮮・中国認識—娯楽に託された自己像から読み解く」にて詳述。
 - 17) 上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観—半井桃水と日朝関係』（筑摩書房，1996年），168～172頁。
 - 18) 姜徳相，前掲書。